

新編

國語讀本

高等小學校
兒童用

卷四

T1A3

10

Ko97k

明治三十四年八月十六日
高等小學校國語教科書
文部省檢定濟

小山左文二
武島又次郎 合著

新編 國語讀本 高等小學校
兒童用

東京 株式會社普及舎

圖書 和圖書 週



福岡教育大学蔵書

新編 國語讀本 高等小學校 兒童用 卷四 目次

| | | |
|------|---------|-----|
| 第十一課 | 櫻井の里 | 三十九 |
| 第十課 | 賢母の教訓 | 三十四 |
| 第九課 | 佐藤つる | 三十 |
| 第八課 | 保護鳥 | 二十七 |
| 第七課 | 害虫 | 二十二 |
| 第六課 | 祭禮に人を招く | 二十 |
| 第五課 | 勇將琵琶に泣く | 十六 |
| 第四課 | 山田長政 | 十六 |
| 第三課 | 鯨獵 | 十六 |
| 第二課 | 海の歌 | 三 |
| 第一課 | 海國 | 一 |

新編 國語讀本 高等小學校 兒童用 目次 株式會社普及舎

| | | |
|-------|----------|-----|
| 第十二課 | 風船 | 四十三 |
| 第十三課 | 烟の目方 | 四十七 |
| 第十四課 | 噴火山 | 五十 |
| 第十五課 | 類焼を見まふ | 五十三 |
| 第十六課 | 善く働き善く遊べ | 五十六 |
| 第十七課 | 平田篤胤 | 五十九 |
| 第十八課 | 愛國少年 | 六十三 |
| 第十九課 | 裁判三題 | 六十七 |
| 第二十課 | 内地雜居 | 七十三 |
| 第二十一課 | 三十五勇士 | 七十六 |
| 第二十二課 | 刺の卒 | 八十 |

新編 國語讀本 高等小學校 兒童用 卷四

第一課 海國

わが大日本帝國は、東南に太平洋あり、西北に支那海、日本海ありて、四面みな海をめぐらせり。

ゆゑに、海上の交通、すこぶる自在にして、朝鮮・支那には、あづかに、兩三日にして著すべく、オーストラリア洲には、十二三日にして達すべし。また、アメリカ合衆國に到らん

にも、十五六日をこゆることなし。これ、わが國の、英國と東西に對立して、世界の海國と稱せらるるゆゑなり。

隆盛。
海國にありて、國の富強をはからんには、よろしく、海軍と海運とを隆盛ならしめざるべからず。

冠
かの英國は、つとに、海運の發達をはかり、また、海軍の擴張をつとめしかば、今は、その富強、世界に冠たるに至れり。これ、まことに、

海國の實をあげたるものといふべし。

坦途。
されば、われ等海國の民たるものは、常に、意を海事にとどきて、海軍と海運との隆盛をはかり、海を見ること坦途の如く、船を見ること車馬の如く、縦横に海上をはせめぐりて、大いに海國の實を擧げざるべからず。

第二課 海之歌

沖
ああ海原ののどけしや
空か水かの沖あひに

船・帆・前

騷

煙をはくは蒸氣船
風をはらむは帆前船
釣りするあまのあとさきに
人を恐れぬあほーどり
鳥のたちるのをかしさよ
船のゆききのおもしろさ
ああ海原のおとろしや
雲騷がしく風あれて
磯もとどろによする波

凄

あれてくだけてさけてちる
船はなみまにただよひて
たちまち高く又低し
げにあらなみのおとろしさ
げに早風の凄まじさ
ああ海原のたふとしや
はてよりはての浦々に
ゆききの出来るも海ゆゑど
海は世界の大路なり

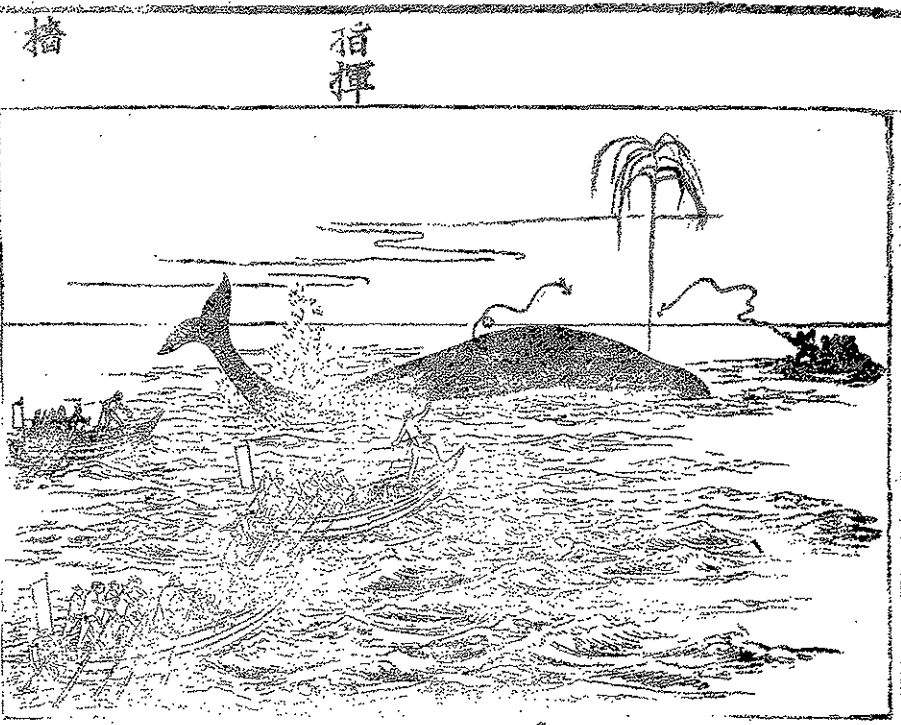
寶庫

漁獵

海草魚類貝さんで
くぢらあざらしおっとせい
とれどつきぬは海なるど
海は世界の寶庫なり」

第三課 鯨獵

スベテ、漁獵ハ、波ノ上デ、雨風ニハダヲサ
ラシテ、ハタラク仕事デ、ナカナカ、勇マシイ
モノデアル。中デモ、一番勇マシイノハ、鯨獵
デアル。



鯨獵ハ、大抵、數十人
ノ漁夫ガ、一組ニナッ
テスルノデアル。ソノ
中ニ、一人ノカシラガ
アッテ、ソレガ、漁夫ヲ
指揮スル有様ハ、マル
デ、大將ガ、兵隊ニ號令
スルヨーデアル。
檣ノ上デ、見張ヲシ

テ居ル人が、鯨ヲ見ツケテ知ラセルト、一同ハ、スグニ、出發ノ用意ヲトトノヘ、十數艘ノ小船ニ乗ツテ、飛ブガ如クニ、沖アヒニ出ル。漁夫ノカシラガ、大音ヲアゲテ、カカレト號令ヲ下スト、數多ノ漁夫ハ、我モ我モト、鯨ニモリヲナゲツケル。

鯨ハ、八方ニ敵ヲ受ケテ、コハタマラジト逃ゲマハル。ケレドモ、モリニツイテ居ル長イ繩ノサキガ、船ニシバリツケテアルノデ、

関

船ハ、鯨ニ離レズ、ドコマデモ追ッテ行ク。鯨ハ、フリフリ、息ヲスルタメニ、水面ニ浮ブユエ、ソノタビゴトニ、モリヲ投ゲツケル。ソレデ、サスガノ鯨モ、ダンダン弱ツテ、船ニ引カレルヨ一ニナル。ソノ時ハ、関ノ聲ガ、海面ニ鳴リ渡ル。

コレマデハ、ミナ、コンナ方法デ、鯨ヲトツタモノデアルガ、今日デハ、汽船ニ乗ツテ、テ、大砲デウチ殺スコトが多クナツテ來タ、

コレモ、漁獵ノ進歩ノ一ツデアル。

鯨は、海中にすむ獸類にして、その形、あたかも魚に似たり。頭は、はなはだ大きくして、全身の三分の一に達し、口には、齒をくして、上あてにひきあり。

鯨の肉は、食用とし、骨とひげとは、種々の細工に用ゐ、油は、燈の用に供し、尾ひれは、らわたは、こやしとするをど、全身一として、やくにたたざる所なし。ゆゑに、一頭の鯨を得るも、利益、數千圓に上るといふ。

第四課 山田長政

今カラ三百年バカリ前ニ、山田長政トイフ大膽十人ガアッタ。アル年、二人ノ商人ニタノンデ、臺灣マデツレテイッテモラッタ。ソレカラ、一人デしゃむ國へ渡ッタ。

時ニ、しゃむ國ハ、ちん國ト合戦ノマッサイ中デアッタ。長政ハ、しゃむ國ノ軍隊ノ有様ヲ見テ、アン十不規律ナコトデ、勝タレルモノカ。トイッタ。しゃむ軍ハ、果シテ大マケヲシタ。

國王ハ、長政ノイッダ言ヲ聞イテ、長政ヲ
大將ニシタ。ソコデ、長政ハ、一萬餘ノ軍兵ニ
日本風ノ甲冑ヲ著セ、日本ノ援兵ガ來タ。ト
援兵。イヒフラシテ出發シタ。

捕

らこんノ兵ハ、コレヲ聞イテ、大ソー恐レ、
サンザンニウチ破ラレテシマッタ。長政ハ、
勢ニノッテ、無二無三ニ攻メタテテ、ツヒニ、
らこんノ都ヲ陷レ、王ヲ捕ニシテ歸ッタ。
ソコデ、しゃむ國ノ武威ハ、遠近ニフルッ



テ來タ。しゃむ王
ハ、大イニ喜ンデ、
長政ヲらこんノ
國王ニシタ。マモ
ナク、しゃむ王ハ、
しゃむ國ノ政ヲ
長政ニ任セタ。
ソノ後、サキニ
長政ヲ送ッテク

レタ二人ノ商人ガ、ミチミチ交易シテ、しゃむノ國マデ來タ。

スルト國王カラノ御召ダトイフノデ、二人ハ、不安心ナガラ、王宮ニ導カレルト、ヤガテ、國王ガ出御セラレタ。二人ハ恐縮シテ、仰ギ見ルコトガ出來ナカッタ。

二人ガ宿ニ歸ルト、ソノ接待ガ、非常ニ丁寧デアッタ。二人ハ、何が何ダカ分ラナイノデ、タダ、モギモギシテ居ルト、ソノ夜、國王ガ

臨御。

臨御セラレタ。

恙

國王ハ、笑ヒナガラ二人ノ肩ヲウツテ、故人恙ナシヤ。トイッタ。二人ハ驚イテ、コレヲ見ルト、先年ノ長政デアッタ。長政ハ、改メテ、自分ガ今日ノ立身ハ、實ニ、兩君ノ賜デアルトイッタ。サウシテ、手厚イオクリ物ヲシテ、日本ニカヘラセタ。

長政ハ、國王ニナッタ後モ、日本ヲ忘レズニ、時々、ソノ國ノ產物ヲ幕府ニ献上シタ。

第五課 勇將琵琶に泣く

昔、天徳寺了伯といふ勇將ありき。ある日、琵琶法師を招きて、平家の曲を語らしめしに、法師は、宇治川の先陣と、扇の的との二曲を語りけり。然るに、了伯は、その曲の終はるまで、涙に咽びて、顔をも上げ得ざりき。

後日、了伯は、家臣どもにむかひ、この程の曲をば、いかに聞きしぞ。と問ひけり。

家臣どもは、いかにも、勇ましき物語にて、



この上もなくおもしろかりき。さるを、君には、始終御涙に咽びたまひしは、いかがおぼしめされたるにや、今もって、いぶかしく存じ奉る。と申したり。

了伯は、これをきき、天を仰ぎて大息し、こ

誓

れまでは、汝等をたのもしきものと思ひしに、今の一言にて、さてさて、力を落したり。まづ、よく、事のよしを考へ見よ。かの高綱はいかが。範頼にも景季にも與へられざりし名馬を頼朝より賜はりて、先陣せよ。先陣仕らん。と誓ひしにあらずや。高綱、もし、人に先陣せられなば、いかでか、生きて歸らるべき。また、かの宗高はいかが。大ぜいの中よりえらばれて、馬を陣頭に乗り出ししにあらずや。宗高もし、的を射とんじなば、かならず、馬上ながら腹かき切つて、身を海底に沈めしならん。

一。滴

この兩人の心の中を察すれば、誰か、あはれを催さざるべき。あれ、戦に臨むときは、いつも、宗高、高綱の心にて、槍を取れり。故に、この二曲を聞きしとき、兩人の心中、思ひやられて、さらに、人ごととも覺えざりき。

されば、あれは、汝等が一滴の涙をも落さ

ざりしを見て、かへって、いぶかしく思ひしなり。實に、たのもしからぬものどもかな。といひしに、家臣ども、深く感じて、何の辭も出てざりきとぞ。

第六課 祭禮に人を招く

格別。

本月二十五日は、村社天満宮の祭禮にあたり候。今年は、秋のみのりもよければ、かざりものなども、いろいろ出来るよしにて、格別にぎはしかるべしと存じ候。何も御かまひは申すまじけれど、御妹様を御連れなされ、前日より御出で下されたく候。右御案内申し上げ候。勿々。

返事

御村社天満宮は、拜殿も御りっぱのよし承り居り、かねてより、参拜いたしたしと存じ居りたるをりから、御祭禮にて御招き下され、ありがたく存じ候。妹も始めてのことゆゑ、御手紙を拜見致すやいなや、

すぐにも参りたしと申し居り候ほどなれば、御厚意に従ひ、妹をも連れて、明日より参上いたすべく候。しかし、決して、御かまひ下さるまじき様、くれぐれも願ひおき候。拜復。

第七課 害蟲

こがね蟲・しゃくとり蟲・てっぱー蟲・菜蟲・こほろぎなどは、植物の芽や葉を食ひ、根を切り、莖を枯らし、果實をいためなどして、恐

一層

ろしい害をするものである。

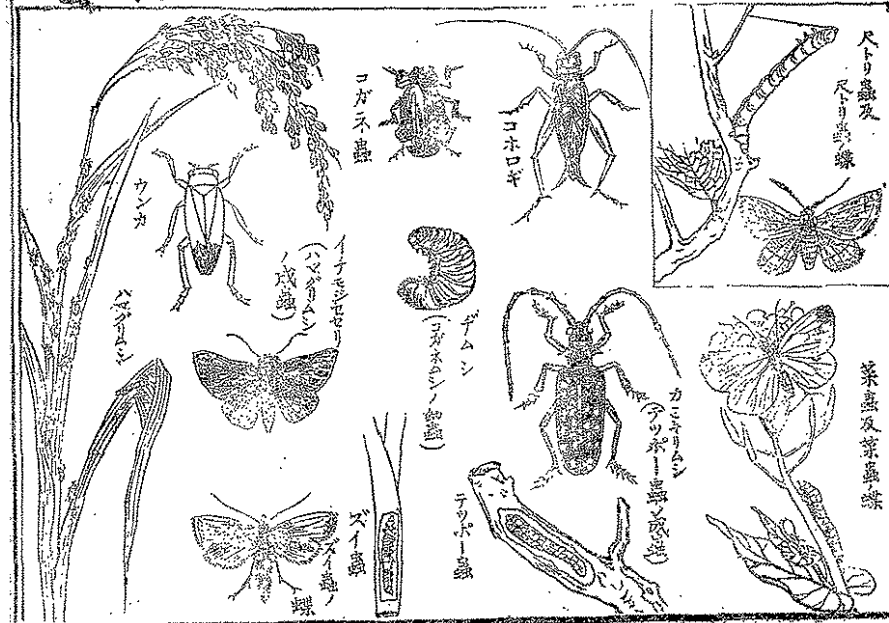
これ等の害蟲よりも一層恐ろしいのは、稲の害蟲である。これには種々あるが、その中で、大害をするのは、うんか・ずい蟲・はまぐり蟲などである。

米粒

うんかは、米粒よりも小さくて、色が青くて、横にはふ蟲である。つねに多く集って、稲の養分を吸ひとり、さうして、その實のりを妨げるものである。

この蟲は、繁殖が非常に早く、少しくんかがついた。といって居る中に、村中の田を荒らしてしまふことは、珍しくない。

稻のすい蟲は、稻の莖に食ひこんで、さんざんに、すいを食ひ、と



蛾

れが枯れると、また、他の莖に食ひこんで、いく本ともなく、稻を枯らすものである。この蟲は、十分成長すると、羽がはえて、蛾の類となる。

巢

はまぐり蟲は、細い絲で稻葉を集め、あるひは、稻葉を巻いて巢をこしらへ、晝は、その中にかくれてゐるが、夜になると、巢から出て、稻葉を食ふものである。この蟲は、後に、蝶の類となる。

焚火。

これらの害蟲は、見つけ次第殺すがよい。殺すしかたは種々あるが、うんかやすい蟲の蛾は、火にあつまるものであるゆゑ、たいまつ・焚火などで取るが、一番たやすい。しかし、うんかを殺すには、その出来はじめに、田の中へ石油を流すが、一番よい方法である。全體、害蟲が出来てから殺すといふのは、もはやおといので、出来ない中によほーするのが、何よりかんじんである。

捕規。則

燕鷗

第八課 保護鳥

保護鳥トハ、國ノ規則デ捕ヘルコトヲサシトメラレテアル鳥類ヲイフ。
ソノ中デ、年中、捕ヘルコトヲトメラレテアルノハ、鷗・燕・コガラ・ヒガラ・四十カラ・五十カラ・エナガ・キクイタダキ・雪加・ムシクヒルリ・ヒタキ・三光鳥・セキレイ・ミソサザイ・ホトトギス・カッコー・ヨタカ・ミミヅク・フクロフ・トビ・クソトビノ二十二種デアアル。

繼

ヲ捕ルトイフコトデアル。シテミレバ、蟲バカリヲ食フ鳥ガ、春カラ秋ヘカケテ、雛ヲ育テル間ニ捕ル蟲ノ數ハ、實ニ、非常ナモノデアラウ。

ソレユエ、コレ等ノ鳥類ヲミダリニ捕ルノハ、國ノオキテニ背クバカリデハナイ。マコトニ、公益ヲ害スル惡シキ仕業デアル。

第九課 佐藤つる

佐藤つるは、備中の國の農家の女なり。幼

愈

きときに、父を失ひ、姉と共に、母の手一つにて育てられたり。家もとより貧しきが上に、母、病にかかりければ、一家の困難、たとへん方なし。つる、時に、年あづかに七歳なりけれど、姉をたすけて、共に母をな抱し、つぶさに辛苦をなめつくしたり。

後、母の病、やや癒えて、姉は、近村の人に嫁ぎたれば、つるは、これより、一人して母を養ひ、人の地を借りてたがやし、男子にも劣ら

新

ず立ち働きたり。

つるは、田畑を耕す間にも、をりをりは、家に歸りて、ねんどろに、母を慰め、また、夜は、母をいたはりて、快く眠りにつかせ、さて、後に、絲を紡ぎなどして、おとくまで働きたり。

明治二十三年六月、母の病重りければ、つるは、晝夜を分たず、母の看病をつとめたり。母、今はのきはに、つるに向ひ、汝、かよあき身にてありながら、長き歲月の間、よく、家事を

微笑。

つとめ、孝養至らざる所なし。今より後は、身を大切にし、また、姉にも心づけてよ。といひたり。つるは、涙ながらに、御心にかけさせたまふな。と答へしかば、母は、微笑して、目をとぢたり。

その後、つるは、朝夕、父母の靈をまつると、生けるに事ふるが如くし、また、その姉によく事へて、母の遺言を守りたり。

孝悌

つるが孝悌の行は、かしくも、雲の上ま

できこえければ、明治二十四年十二月、縁綬
表彰褒章を賜ひて、その善行を表彰せられたり。

第十課 賢母の教訓

率

勅命。

延元元年、逆賊足利尊氏、西國の兵を率ゐ
て、都に攻め上らんとしけり。楠木判官正成
勅命を奉じて、これを兵庫に防ぎけるが、
賊の大軍には敵しがたく、つひに、湊川にて
戦死しけり。

尊氏は、正成の首を楠木の家に送りける

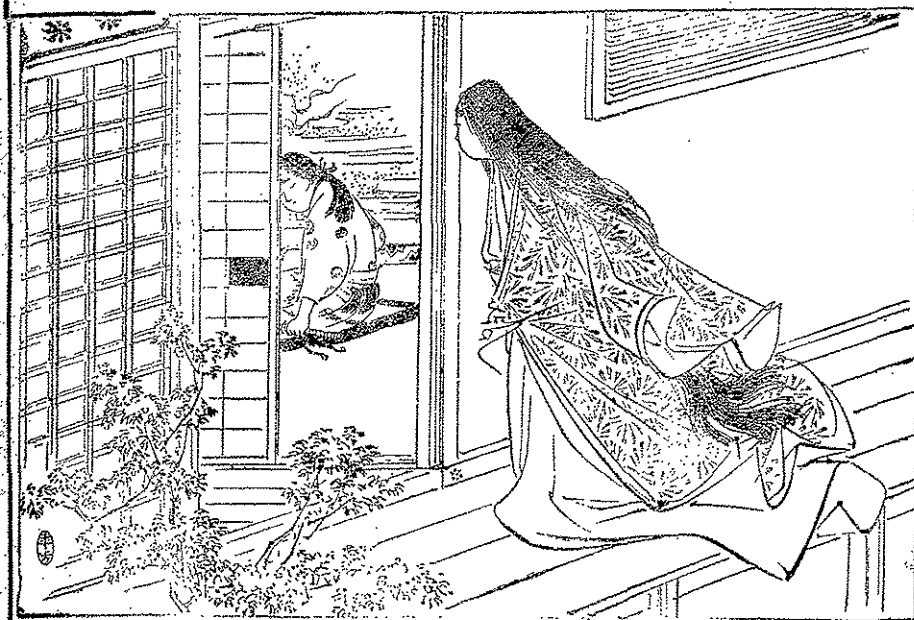
窺

に、一族寮人うち寄りて、悲むこと限りなか
りき。

中にも、正行は、父の顔の、あさましくかは
りはてたるを見て、悲みのあまり、しばしは、
ものをもいはでありけるが、やがて、ただな
らぬさまにて、持佛堂の方へ行きたり。

母は、これをあやしみ、あとつけ行きて窺
ふに、正行は、父が、かたみにとて留め置かれ
たる短刀にて、今や、自殺せんとせり。

芳



母は驚きて走り寄り、正行が小腕にとりつき、せんだんは、二葉より芳しといふ。汝幼なけれども、父が子ならば、忠義の道はよく知るべし。故判官が、兵庫へ向はれし時、汝を櫻井驛によび給ひ

奪

て、われ、たとひ、戦死すとも、汝、かならず、今一度軍を起し、逆賊を滅ぼして、大君の御心を安んじ奉れ。と、御遺言せられしにあらずや。汝、まのあたり、かくとうけたまはり、われにも、つぶさに語りしものを、いつの程にか忘れける。今、かかるふるまひあらば、父の御遺言に背くのみか、大君の御ためにも、不忠の至りなり。とて、その刀を奪ひ取れば、正行、今は、自殺を思ひとどまりて、母もろともに、

教訓

その處に泣き伏したり。

この後、正行は、母の教訓を守りて、父の遺言に背かざらんことをひたすらに心掛け、つひに、忠臣孝子の鑑と仰ぎたふとばるるに至れり。

鑑

セングンハ、二葉カラ芳シイトイ、テモ、二葉ノ時ニ枯レテシマヘバ、何ノカヒモナイ。

楠木正行ガ、自殺シヨウトシタノハ、マヨトニ、セングンガ、二葉ノトキニ枯レヨウトシタノデアル。

袖

コノ時、ソノ母ガ、ネンゴロニ教ヘサトシテ、ソノ自殺ヲトメナカッタナラバ、正行ハ、芳シイ名ヲ、世ニノコスコトガ出来ナカッタノデアアル。

第十一課 櫻井の里

青葉しげれる櫻井の里のあたりの夕まぐれ木の下かげにこまとめて世の行く末をつくづくとしのぶ鑑の袖の上に散るは涙かはた露か

捨

正成涙をうちはらひ
わが子正行よびよせて
父は兵庫におもむかん
かなたのうらにて討死せん
なんぢはここまで來たれども
とくとく歸れふる里へ
父上いかにのたまふも
見捨てまつりてわれ一人
いかで歸らん歸られん

この正行は年ことは
いまだ若けれもろともに
つれ行き給へ死出の旅
なんぢをこより歸さんは
わが私のためならず
おのれ討死なさんには
世は尊氏のままならん
早くおひ立ち大君に
仕へまつれよ國のため

惜

このひとふりはいにし年
君の賜ひし物なるぞ
この世の別れの形見にと
なんぢにこれを贈るなり
行けよ正行ふる里に
なんぢの母は待ちまさん
共に見送り見かへりて
別れを惜むをりからに
またも降り来る五月雨の

装置

網 籃

空に聞こゆるほととぎす
誰かあはれときかざらん
あはれ血に泣くとの聲を

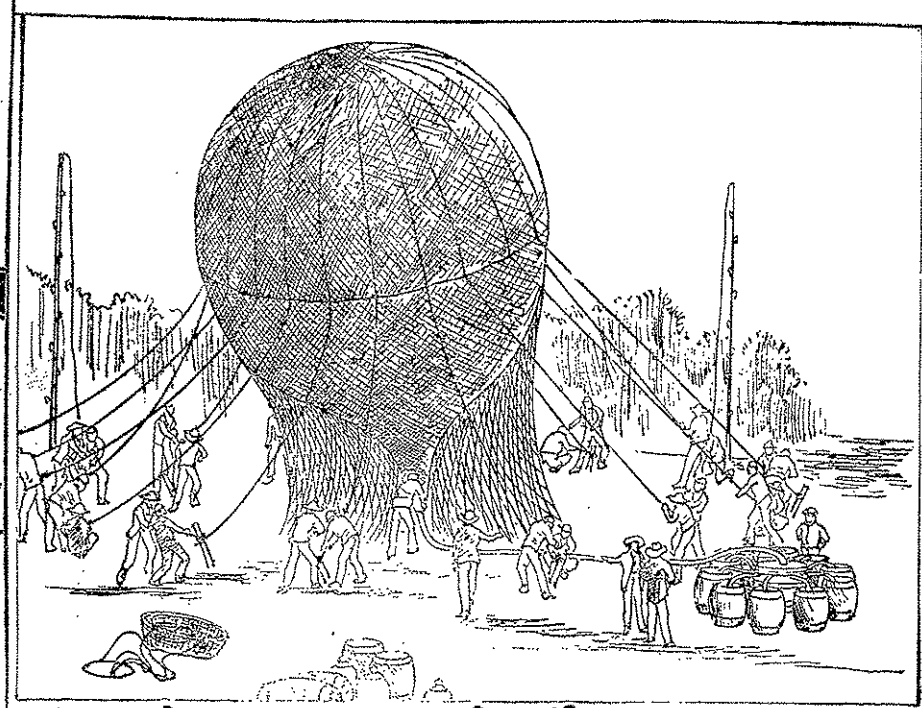
第十二課 風船

風船ハ、今ヨリ百年アマリ前ニ、ふらんす
人ガ、始メテ發明シタモノデアアル。ソノ装置
ハ、ゴム引キノ絹デコシラヘタ大キナ囊ニ
網ヲカブセテ、網ノ下ノ端ニ、一二人が乗ラ
レルクラキノ籃ヲツルシタモノデアアル。

水ヨリ輕イ物が、水上ニ浮ブヨ一ニ、空氣
ヨリ輕イモノハ、マタ、空中ニ昇ルモノデア
ル。ゾレユエ、風船ノ囊ニ、空氣ヨリモ輕イガ
スヲ充タスト、囊ハ、籃ト一緒ニ、高ク空中ヘ
昇ッテユク。

壯快。

風船ハ、海面カラ、ホトシンド、二里半ノ高サ
マデ昇ルコトガ出來ル。ゾレユエ、モシ、風船
ニ乗ッテ、高イ處カラ下界ヲ見下スト、ゾノ
壯快ナコトハ、言葉ニイヒツクスコトが出



來ナイサウデア
ル。シカシ、高ク昇レ
バ昇ルホド、空氣ガ
薄クナルタメニ、呼
吸ガ、ダンダン苦シ
クナッテ來テ、シマ
ヒニハ、鼻カラ血ノ
出ルコトガアル。マ
タ、寒サノキビシイ

蓋

傘

タメニ、指ガコゴエテシマフコトモアル。
風船ヲオロサウト思フ時ニハ、囊ノ頂ニ
設ケテアル小サイ孔ノ蓋ヲ開イテ、中ノガ
スヲ出スノデアル。ガスが出テ、囊が縮マル
ニツレテ、ゾノ傍ニアル傘ノヨ一十モノガ
ダンダン開ク。サウシテ、シヅカニ、風船ヲ地
面ニクダラセル。

水より輕きものの、水上に浮ぶと同じく、空氣
より輕き物も、また、空中に昇るなり。かの風船は、

實に、この理によりて發明せられたり。

風船の囊に充たすがすは、多くは、石炭がすな
り。おもちゃの風船玉などには、多く、すいをがす
を充たす。これ、石炭がすも、すいをがすも、空氣よ
りは、はるかに輕きものをればなり。

第十三課 烟の目方

いかなるものでも、目方のないものはな
い。ただ、その目方に、輕いと重いととの相違が
あるばかりである。

烟のよーなものでも、かならず、目方はあ

るのであるが、それが、ちよつとはかれない
有。無。ゆゑ、誰も目方の有無を疑つて居る。

この事について、昔、英國の女王エリサベ
スと、理學者ラレーと、あらそはれたことが
あつた。

ラレーは、烟も、やはり、一つの物でありま
すゆゑ、目方のないはずはありません。」と申
しあげ、女王は、「烟は、上に昇るものであるゆ
ゑ、目方のあるはずはない。」と仰せられた。

そこで、ラレーは、一つまみの煙草を持っ
て、女王の御前に出で、「臣は、この煙草から卷
き上る烟の目方をはかつて、御覽に入れま
せう。」と申し上げた。女王は、「それはおもしろ
い。見たいものである。」と仰せられた。

やがて、ラレーは、御前に天秤を持って出
て、その煙草をはかり、これに火をつけ、まっ
たく燃えをはったあとで、その灰をはかつ
て見た。さうして、煙草の目方から、灰の目方

燃

天。秤

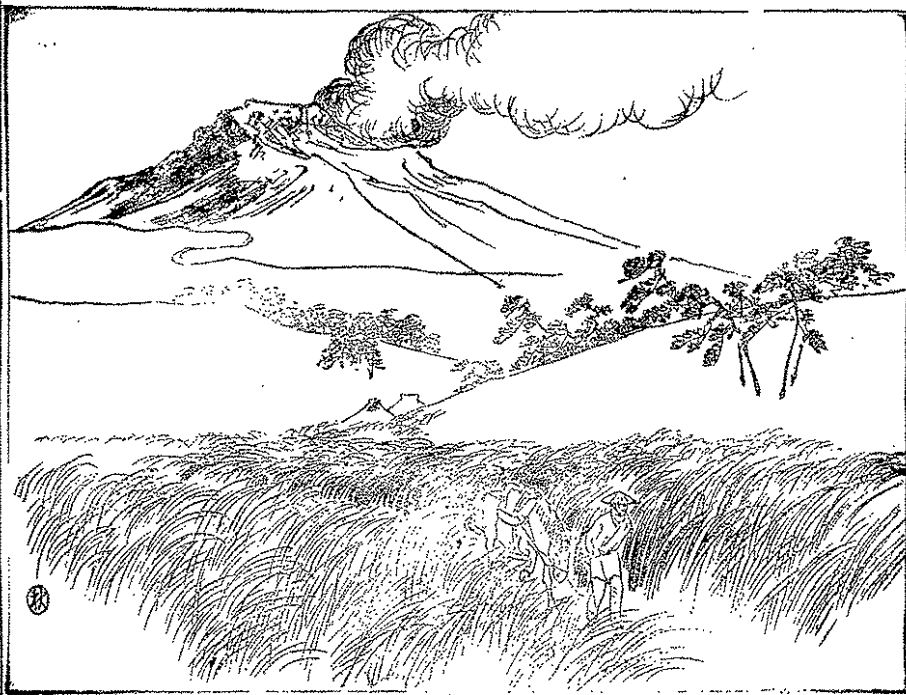
をひき去って、この残っただけが、烟の目方であります。と申し上げた。これには、女王も舌をまかれたといふことである。

第十四課 噴火山

地球の内部は、はなはだ熱きものなり。ゆゑに、地上の水、もし、地中に浸みてみて、その熱き處に達するときは、熱のために水蒸氣となり、強大なる力を生じて、土や岩を破り出づ。かかるはたらきを噴火といふ。

浸

略



その噴き出す勢にて、焼石灰とけたる岩などの押し出されて、穴の周圍に高く積もりたる處を噴火山といひ、また、略して、火山ともいふ。

噴火山を横より

漏斗。

見れば、その形、ほとんどすり鉢をふせたるが如し。また、上より見れば、中央、深くくぼみて、その形、あたかも漏斗の如し。

徴候。

噴火山には、信濃の浅間山、肥後の阿蘇山の如く、現に噴火するものあり。また、富士山、磐梯山の如く、時として噴火するものあり。磐梯山は、久しき間、噴火の徴候だになかりしゆゑ、火山と思ふ人は、ほとんど、あらざりしが、明治二十一年七月十五日、突然噴火

潰

して、岩石ほとばしり、土砂飛散し、これがために潰されたる人家、およそ百戸、埋められたる地積、およそ五方里に及びけり。ことに痛ましかりしは、一時に五百餘人の死傷者を出しけることなり。

第十五課 類焼を見まふ

昨夜は、ことの外、風はげしかりしに、をりから、御隣家より出火し、御類焼なされたるよし。誠に、御氣の毒の至りに存じ候。早

怪我。

粗飯。

遠慮。

速かけつけて、御手傳ひいたすべきは
なるに、をりあしく、親戚へまゐりをり、た
だ今、歸宅したるよゝの次第にて、御無禮
いたし候。皆様には、別に、御怪我もなく御
立ちのきなされたるか、御あんど申し居
り候。取りあへず、粗飯一ひつ、煮菜一重さ
しあげ候。下男には、御跡のかたづくまで
は、御手傳ひいたすべき様、申しつけ置き
たれば、御遠慮なく、御使ひ下さるべく候。

匆々。

返事

一昨日は、早速御見まひ下され、有りがた
く御禮申し上げ候。當夜は、遅くまで來客
あり、一同、まだ床につき申さず、下男等も、
をりよく、うちとろひ居りたるため、火事
と聞くやいなや、老父母および子供は、東
町の親類にあづけ、必要の諸道具も、大抵
は持ち出したれば、御安心下されたく候。

男衆

御男衆などのお骨折によりて、跡かたづ
けも、今日にてすむべしと存じ候。右御禮
申し上げ候。匆々。

第十六課 善く働き善く遊べ

犬鳥圭氏、かつて、英國より歸りて後、人に語りて曰く、

誤

雜談。

「英人の職務をとるや、時を誤らずして業につき、嬉戲せず、雑談せず、茶を飲まず、煙草をすはず、一心に、その業務を勵み、すこしの

ひまも、休息することなし。故に、その事業、著

著として擧り、成功きはめてすみやかなり。

然るに、終業の時限となれば、早々業をや

めて、家に歸り、服を改めて戸外に出で、ある

ひは馬をはせ車を飛ばし、あるひは釣を垂

沈默

專心

食車。

れ船を浮べ、就業の間沈黙なりし人は、談笑
やまざる人となり、業務に専心なりし人は
たえて業務を思はざる人となり、日暮とな
れば、家に歸りて、家族と、楽しく食卓にむか

ふを常とす。

英人のするところ、おほむねかくの如し。これ、その事業に刻苦するにもかかはらず、心身、勇壯活潑にして、常に餘力あるゆゑなり。

おもふに、わが國の人民は、よく働きよく遊ぶ習慣、すこぶるとぼしきが如し。この一模範事は、英人を模範とせんこと、わがもつとも望む所なりと。

善ク働キ善ク遊ぶ人ハ、仕事モハカドリ、カラ
デモスコヤカニナッテ、常ニ愉快ナ月日ヲ送り
マス。

コノ反對デ、不規律ガ習慣トナッタ人ハ、仕事
モハカドラズ、カラデモヨワクテ、常ニ、不愉快ナ
月日ヲ送りマス。

ソレユエ、我等ハ、ツネニ、規律ヲ守ッテ、善ク働
キ、善ク遊ぶ習慣ヲツケネバナリマセン。

第十七課 平田篤胤

平田篤胤は、羽後國秋田ノ人ナリキ。幼ヨ
リ心敏ク、モットモ、學問ヲ好ミタレバ、學業、

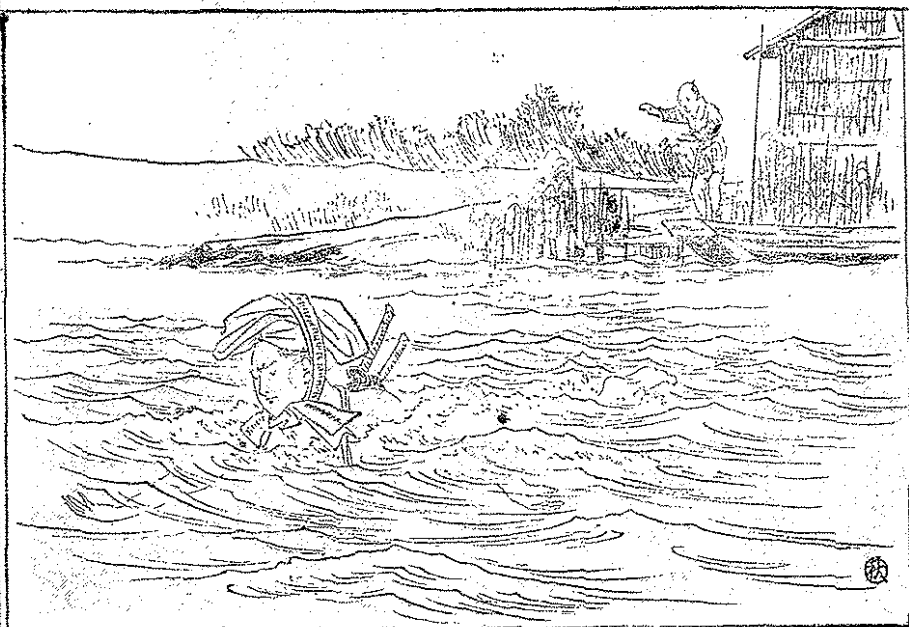
才學。

應

携

ツトニ、衆ニ秀デタリ。學友等、ソノ才學ヲネ
タミ、アル日、師ノモトニテ輪講ノヲリ、イロ
イロト質問シテ、篤胤ヲイギメントシタリ。
ソノ時、篤胤ハ、問ニ應ジテ、スラスラト答
ヘタレバ、學友等ハ、コレヨリ、深ク篤胤ニ心
服シタリ。

二十歳ノ春、篤胤、大イニ感ズルトコロア
リテ、江戸ニ赴カントシ、ワヅカニ一兩ノ金
ヲ携ヘテ、故郷ヲ出デタリ。



カクテ、野ニ卧シ山
ニ寝ネ、ヤウヤウ、江戸
ニ近キ渡シ場マデ來
リタリ。ソノ時、モハヤ、
渡シ錢ダニナカリシ
カバ、著物ヲ頭上ニ結
ビツケテ、ソノ川ヲ泳
ギ越シタリ。

篤胤ハ、江戸ニ著キ

テヨリ、アルヒハ、荷車ヒキトナリ、アルヒハ、
商家ノ飯タキトナリ、獨力ニテ、ロスギヲナ
シツツ、寸陰ヲ惜ミテ書ヲ讀ミタリ。コノコ
ト、ツヒニ、板倉侯ニ聞コエケレバ、侯、ソノ篤
學ニ感ジテ、家臣平田某ノ養子トナシ、大イ
ニソノ志ヲ助ケタリキ。

潛

篤胤ハ、ソレヨリ、モッパラ、學問ニ心ヲ潛
ムルコトヲ得テ、ツヒニ、皇道ヲ發揮シ、春滿^{ハルナミ}
真淵^{マコト}宣長^{ノボナガ}トアハセテ、國學ノ四大人ト仰ガ

ルルニ至レリ。

第十八課 愛國少年

むかし、スペインから、イタリーへ向って
出た郵船の乗り合ひの中に、十一になるイ
タリー生れの一少年があつた。

興行。

この少年は、もと、手品師につかはれて、フ
ランスや、スペインなどを興行し廻って居
たものである。親方のむごい扱ひにこらへ
きれないので、自國の領事館に保護を頼ん

だゆゑ、領事は、ふびんに思つて、イタリーの親元へかへすために、この郵船にのせたのである。

乗り合ひの客の中に、この少年をあはれんで、金をあたへたものがあつた。少年は、吊り床に入つて、この金で、親や兄弟や友達への土産物や、自分の好きな物などを買はうと、ひとり、にこにこ喜んで居た。

すると、前に金をくれた客たちが、いろいろ

清。潔。



ろの話が始めた。ある一人が、イタリーのはたごやは、實にきたない。イタリーの道はせまい。建物も、低くて小さい。と、しるると、また他の一人が、イタリーの役人は無學だ。イタリー人は、一たい、清潔

といふことを知らない國民である。」とをし
った。

その言葉のをはらない内に、そこへ貨幣
貧乏を投げるものがあつた。たとひ、貧乏はして
居ても、おれの國の惡口をいふ奴からは、一
文ももらはないぞ。」といふ鋭い聲が、たちま
ち、吊り床の中から發せられた。

昔、いたりー國ニ一人ノ少年アリキ。ソノ家貧
シカリシカバ、幼少ヨリ、手品師ニ使ハレテ、諸國

ヲメグリアルキケリ。

コノ少年、カツテ、すべいん國ヨリ、船ニ乘リテ
本國ニ歸ルトキ、乘リ合ヒノ客ニ、多クノ金ヲメ
グマレテ、喜ビ居タリキ。ヤガテ、ソノ人々ノ、いた
りー國ヲアシザマニイフヲ聞キテ、大イニ怒リ、
「身貧シトモ、ワガ國ヲソシルモノヨリハ、一文モ
モラハズ。」トテ、コトゴトク。ソノ金ヲナゲステケ
リトイフ。

第十九課 裁判三題

木の證人

昔、一少年、友人に預けたる金を取り戻さ

訴

んとしけるに、友人は、「金を預りたる覚えなし。」といひたり。よりて、その少年は、これを裁判所に訴へたり。

判事は、原告に向ひ、「汝、何處にて、金を預けたるか。」と問ひしに、原告は、「ある木の蔭にて預けたり。」と答へたり。

判事は、「さらば、その木を證人に呼び出すべし。」と告げ、ただちに、その手続を行ひたり。ややありて、判事は、時計を見ながら、「もは

被告。

や、證人の來るべき時刻なり。」と獨語したり。この時、被告は、何心なく、ここよりの木までは、一里もあらん。故に、いまだ、來るべき頃にあらず。」と口ばしりたり。

證據。

判事は、これをききて、「汝、その木の所在を忘れざりしは、何よりの證據なり。」とて、左の如く判決したりとど。

被告が、原告ヨリ金ヲ預カリシコトハ、自身ノ答ニテ明カナリ。ヨリテ、ソノ金ヲ原

告ニ返スベシ。

釜ぬす人

盗
昔、ある人、隣家のゐざりに釜を盗まれたり。と訴へ出でたり。

検事は、ただちに、右のゐざりを捕へしめ、また、その釜をとりおさへて調べたるに、ゐざりは、私は、兩手にてゐざりあるけば、釜を盗みても、持ち歸るべき様なし。といひたり。判事は、ゐざりに向ひ、盗みたるにもあら

悦

ぬ汝の訴へられしは、氣の毒なり。その釜を汝に與ふべければ、持ち歸れ。といひ渡したり。よりて、ゐざりは、大いに悦び、釜をとり、頭にかぶりて、ゐざり出でたり。

平。伏

一判事は、これを見て、横著ものめ。汝の盗みに相違なし。といひたれば、ゐざりは、驚きて、おもはず平伏したりとど。

無。罪

瓦の無罪

昔、一貴人、ある家ののき下を通りたるに、

屋上の瓦、風に吹き落されて、貴人の頭を傷つけたり。

拘引。

辯護士。

その瓦は、検事の告發によりて、法廷に拘引せられ、今にも罪に處せられんとしたり。その時、風は、窓より入りて、書類を吹き飛ばし、檢事の面を打ちたり。辯護士は、これを見、ただちに判事にむかひて、貴人を傷つけたるは、風にして瓦にあらず。只今、書類が、檢事の面を打ちたるも、風のためなるにて明

かなり。」と辯護したれば、瓦は、無罪となりて、元の屋上へ戻されたりとど。

第二十課 内地雜居

區。域。

實。施。

軒

數年前までは、外人の居留地を、ある區域内に限りしが、明治三十二年七月よりは、改正條約、實施せられ、國內、何れの土地にも、外人の居住することを許されたり。

されば、内地に雜居する外人は、これより次第に増加し、従ひて、内外の人民、軒を並べ

て、商業を營むこともあるべく、あるひは、力を合せて、工業を起すこともあるべし。また、青年者の間には、共に學び、共に遊び、互に往來するものもあるべし。

されど、外人は、元來、わが國民と、その風俗習慣を異にするものなれば、われの、常事としてあやしまざるふるまひも、かれに不快を感じしむることあるべく、また、かれの懇なるふるまひも、われには、かへって、無禮に

懇

思はるることもあるべし。かくては、あひ互の間おもしろからずして、何事をなさんにも、不便多かるべし。

されば、わが國民たるものは、つとめて、かれの事情を詳かにし、また、わが事情をかれに通じ、信義を守り、深切を盡して、かれと交り、決して、かれのあなどりをうけず、また、わが品位をおとさず、外人をして、知らず知らず、わが美風に感化せしめんことを心掛く

詳

べし。

内地難居ニ關スル 詔勅ノ中ニ、善ク遠人ニ
交リ、國ノ品位ヲ保テ、トイフ御コトバガアリマ
ス。コレハ、信義ヤ深切ヲ以テ、外人ヲナツケネバ
ナランゾ。マタ、外人ニアナドラレ、國ノ品位ヲオ
トシテハナランゾ。トノアリカタイ御サトシダ
アリマス。

我等國民タルモノハ、片時タリトモ、コノ御サ
トシヲ忘レテハナリマセン。

第二十一課 三十五勇士

明治二十八年七月十一日、ワガ軍ノ一隊

土匪
征伐

ハ、大姑^{ダイコ}陷^{カン}ナル土匪ヲ征伐セントシ、マヅ、糧
食ヲ船ニ積ミ、三十五人ノ勇士ニマモラセ
テ、大姑陷川ヲサカノボラシメキ。

船ノ三角湧^{サンカウ}ニ近ヅケル時、數多ノ土匪、不
意ニアラハレ、ワガ糧食ヲ奪ハントシケリ。

會長。

衆。寡。

櫻井特務會長、一同ヲ指揮シテ、岸ニ上リ、
コレト戦ヒシガ、衆寡敵セズ、三人五人ト次
第二討死シテ、オノレモ、マタ、ツヒニ、敵丸ニ
タフレケリ。

激



江橋軍曹、コレヲ見
テ、日本男子ノ死スベ
キ時ハ、今ナルゾ。トサ
ケビツツ、真先ニ進ミ
ケレバ、残レル兵士モ、
ワレ劣ラジト、敵中ニ
突キ入り、激シク戦ヒ
ケリ。

カカル中ニ、江橋軍

懸 遁

曹ヲ始メ、ミカタハ多ク討死シ、残ルハ、ワヅ
カニ四人トナリケリ。

ソノ中ナル田中一等卒ハ、事ノオモムキ
ヲ本隊ニ通ゼンモノヲト、辛クモ、ソノ場ヲ
遁レ出デ、アル小池ニ身ヲ潛メテ、夜ニ入ル
ヲ待チシガ、アヤニク、明月天ニ懸カリテ、晝
ノ如クナリシカバ、陸上ヲ行カンハ危カラ
ントテ、銃ヲ抱キテ川ニ入り、流レニ從ヒテ
下リケリ。

跳

夜明ヶ近キ頃、人馬ノ聲ニ驚キ、堤ニ上リテ、ヒソカニ様子ヲ窺ヒシニ、ウレシヤ、ワガ軍ノ進ミ來ルニチアリケレバ、勇ミテ跳リ出デ、事ノ由ヲ本隊ニ知ラセケリ。

殘ル三人ノ中、二人ハ、辛ウジテ本隊ニ歸リシガ、一人ハ、ツヒニ、歸リ來ラザリキ。

喇叭

第二十二課 喇叭卒

聞くもいさまし喇叭卒

曉々

曉々吹き出す進軍譜



喉 遊

たちまち飛び来る流れ丸
胸にあたりてどーと伏す
伏すもゆるめぬ喇叭の手
いよいよはげしく吹き鳴らす
トットットットットット
みかたの勇氣おとさじと
忠義の息を吹き込む
呼吸のたびに送る
血しほに喉をうるほして

瞬時。

吹けどもあはれ蟲の息
次第に弱る喇叭の音
トットットットット
心はやたけにはやれども
急所のいたでにこらへかね
喇叭の聲とつく息と
たえしはおなじ一瞬時
かはるはみかたが成歡キクワンの
とりで乗っとり祝ふ聲

バンザイバンザイバンザイ

新編 國語讀本 高等小學校用 卷四終

明治三十四年六月廿五日印
 明治三十四年六月廿八日發
 明治三十四年八月四日訂正再版印刷
 明治三十四年八月八日訂正再版發行

新編國語讀本高等科

| 價 定 | |
|-----|------|
| 卷一 | 金二十錢 |
| 卷二 | 金二十錢 |
| 卷三 | 金二十錢 |
| 卷四 | 金二十錢 |
| 卷五 | 金二十錢 |
| 卷六 | 金二十錢 |
| 卷七 | 金二十錢 |
| 卷八 | 金二十錢 |
| 卷九 | 金二十錢 |
| 卷十 | 金二十錢 |

不許複製

著者 小山 左文二
 著者 武島 又次郎
 印刷者 兼 株式會社普及舍
 代表者 右社長 山田 禎三郎

發賣所

東京市日本橋區本町一丁目十一番地
 五車堂株式會社

意 注

- (一) 本社出版の書籍は専ら堅牢ならんことを期し常に紙質を撰び調製に注意致し居り候へども多數の中或は粗製のものなれども申しかね候。萬一かくの如きものこれあり候はば御手数多から御注意を煩はしたく候然る上は必ず無代價にて堅牢なるものと御引換申すべく候。
- (二) 本社出版の書籍はこれに相違の事實御發見相成り候はば御一報下されたく候。
- (三) 本社出版の書籍は本社へ直接御注文の分に限り書籍部數の多少に係らずその運賃の悉皆を本社にて負擔いたすべく候。



明治 34
85